



親鸞の生涯

終章



親鸞という人は、終生「自分」を語ったことのない人であった。ただただ仏教に順順し、師訓を仰ぎ、如来の本願を信順するなかでその生涯を生きた人であった。従つて彼の著作や記録にはない「親鸞生涯の余録」を最後に伺つてみようと思う。

憶測・推測の域を出ないこの文章であつても、それがひょっとしたら案外ことの真実をあらわしているかも知れない。世間から引退して仕事も名前さえ失つてしまつた後期高齢者の老後の一日一日に、むしろそのひとの全人生があるのかも知れない。

「善口鸞事件」（長男善鸞を関東の念佛教団混入沈静のため派遣したが、それがかえつて逆作用し関東念佛教団を混乱させしめついに親鸞は彼を勘当義絶した事件）。があったのは康元元年（二五六）親鸞八十四歳の時であった。なぜこのような事件がおこつたのか

一、関東にのこされた親鸞の弟子の形成した幾つかの念佛集團。その多くは在地の権力者と結び付いた関係の中で教線を保つていたから、当然その間の勢力争いをはらんでいた。二、この念佛教団のあいだにも念佛理解についてのいろいろな相違があつた。1念佛を死後往生のためとして励む。いわば呪術祈祷として扱う。2、念佛は即身成仏と理解しその上は造惡おかまいなしとして世間と対立する。3、念佛を弘めるためには當時一般的に

行われていた「善光寺」の「聖」として振る舞う必要もあつた。4、各派それぞれ正統性を主張するため、親鸞の「面授口決」（めじゆく）直接あつて正統との証言をとりつけるため、競つて上京し親鸞との面談をもとめるにあたり、他派を非難し上訴したことがあつた。

こういう環境のなかに、それを是正する任を負つて関東に派遣された善鸞が、その任務遂行のために、かえつてその「うねり」のなかに呑み込まれていった経緯も想像できる。

「夜ひそかに父から授けられた秘伝」（秘事法門）、在地修驗道勢力と結託して護符祈祷に念佛を使つたり、「継母にまどわされた」などあらぬ偽りの身の上話など、讒言とばかりも言えない行動のあつたことも事実である。

それに対する親鸞は、親子と言ひながら、法の真実を守るために許すことはできなかつた。「勘当・義絶」せざるを得なかつた。

しかし「義絶」にいたるまでに親鸞は、むしろかえつて善鸞への訴えを疑つた。「まさかあの善鸞が」と…。かれはむしろその子の父である自身親鸞を悲嘆した。

彼の晩年老後は、この悲嘆のうちにあつたのではないかと想像する。

以後、かれはただ一人、年老いた者の側にいてくれる善鸞の子息「如信」にその思いをうちあけ、そして改めて如来の本願の生起本末を、この青年如信に語つて聞かせるしかなかつた。

そのほかには、例えば法然さまのご命日に「文字のこころも知らず愚痴きはまりなき田舎の人びと」と合い寄つて、法の味いや先師の恩徳を謳つた「三帖和讀」を、みなで朗詠したであろう。

ところで、「幕帰絵詞」という書物に、「善鸞」のことがチラリと語られている。

それは親鸞が五条西洞院の自宅に、夜、善鸞を呼んで、二人、炉辺をはさんで額をあわせて話しこんでいた。そこへ顕智という弟子が入つてくると、二人はハッと話をやめた。

その時の話題は何かなど、記録はない。

しかし想像はつく。

その後の関東の念佛教団の様子、なかんずく善鸞自身の暮らしぶりや念佛生活。と同時に、親鸞の今の心境ではなかつたのか。

わが子善鸞を激しく糾弾したのではない。

そうではなくて、『愚禿悲嘆述懐和讚』がこのときの親鸞の心境ではなかつたか。

それらのことは、丁度そのころ、常陸の国河和田にいた「唯円」という人物が上京し、しばらく親鸞のもとにとどまつて見聞した親鸞のありのままを、のちにまとめた『歎異鈔』に活写されているのではないか。

今は、その第四条を読み、親子肉親のどうしてみようもない恩愛の情が、如来大慈悲のなかに包摶される経緯を、訥々と語る親鸞の肉声として聞いてみたい。

仏教の慈悲（ものを慈しみ、かなしむこと）には、自力聖道門における慈悲と、他力淨土門における慈悲があります。

自力聖道門における慈悲というのは、生きとし生けるもの哀れみ、慈しむ心であり、さらに守り育てようとするところでもあります。しかしながら、このような慈悲は、無力なわたしたちには、とても最後まで思いどおり助け通すことは困難なことなのです。

一方、他力淨土門における慈悲というのは、阿弥陀仏の本願に目覚めて念佛申す身となつて淨土に往生し、すみやかに仏とならせてい

ただき、仏の大慈悲のこころをもつて、思いのままに生きとし生けるものを救うことあります。

この世に生きているあいだは、どんなにいとおしいとかかわいそうだと思っても、思いのままに救うことなど不可能なことですから慈悲のこころだというべきでしょう。

この自力聖道門の慈悲は、完全なものとは言えないのです。

だからこそ、阿弥陀仏の本願を信じ、念佛申すことだけが、最後まで徹底しうる眞実の慈悲のこころだというべきでしょう。

との聖人のおことばでした

十一月 雨相月 のこよみ

三日 光顯寺報恩講（大遠忌・繼職）

四日 出石お城まつり

五日 朗誦ボランティアあすなる（録音）

六日 正福寺報恩講（→六日）

七日 斎藤はるゑ様三回忌

八日 高福寺報恩講（七日）

九日 平野初枝様三回忌

十日 田村忠治氏宅法事

十一日 湯口良明氏宅法事

十二日 本覺寺法恩講（→十四日）

十三日 わみがさ清掃奉仕

十四日 山下祐治様一周忌

十五日 西方寺報恩講（→十五日）

十六日 福成寺報恩講（→十六日）

十七日 出石病院検診

十八日 佐田・奥栗尾報恩講

十九日 あすなろ（編集）

二十日 口栗尾報恩講

二十一日 保谷・日殿報恩講

二十二日 勝林寺報恩講

二十三日 関川永氏宅法事

二十四日 佐田・奥栗尾報恩講

二十五日 田中嘉信氏宅法事

二十六日 正法寺報恩講

二十七日 正法寺報恩講

二十八日 正法寺報恩講

二十九日 正法寺報恩講

みのりを聞く会



米寿をまえに



本当に偶然のことでした。町の片隅にある小さな公園で、まあ、何年ぶりでしょうか、小学校の同級生が偶然、三人パッタリ出会いました。

互いにおどろいて、異口同音にいつた言葉。「おまえ、死なずに生きとつたんか」

なんでも一年前、同級会の世話役の者から、幹事の責任としてなんとか「同級会」を開かねばと企画してみるが、養護施設に入所しているもの、足腰不自由で家から出られない者、もう何年もまえから痴呆で外出禁止になつている者。なにやかにやの事情のなかで、結局「同級会」は不発。そんななかでの偶然の出会いだったので。

「おまえ死なずに、生きとつたんか」この日この出会いの実感がありました。

ややあって車椅子の人がいいます。

「死ねずに、生きとるんや」女房は十年もまえに死んで、いまは息子の嫁に世話になつていて。何度も死のうと試みたが、なかなか死ねん。しうことなしに生きているだけ。「死ねずに生きとるのもつらいで」と。

ひとことでなく涙が出てしました。

その雰囲気を打ち消すように一番元気な人がいいました。

「僕は、朝、目が覚めたら、今日のスケジュールを立てるんや。どんな小さなことでもつまらんことでも。一日のその目標にむかって自分をはげますんや。生きとる実感は自分で作る。それが生きとるということと思う。そんないへんなこととは違う。そうしていわば遊ばせてもらってるんや。遊戯三昧とかいわうあれや」

成る程、「生きとる」といって死んでいるもおなじようでは、しょうがいなーと思つたりもしました。

「願い」。今日一日の「願い」に生きてこそ。

ご門と各位

報恩講ご案内

報恩講は浄土真宗門徒(信徒)にとって、一年中でもっとも大切で、親しみ深い行事です。淨土真宗の御教えを明らかにしてくださった宗祖・親鸞聖人の法要だからです。

聖人は弘長2年(1262年)11月28日、90歳の生涯を京都でとじられました。そして聖人のごされた徳をしのんで、毎月28日に門徒たちによって、お念佛の集まりが行われるようになりました。これがさらに大きく広がって、本願寺第三世の寛如上人によって法会(ほうえ)の基本となる形ができあがりました。

そしてこの法会の集まりを「講」というようになりました。聖人のご恩に報い、お念佛を一層ありがたく味あわせていただこうというこから「報恩講」と呼ばれるようになったのです。

勝林寺では毎年報恩講を

11月21日(御伝鈔拝読6時半 法要午後7時半より)

*お斎は、5時半より

22日(午前10時より)に勤修いたします。

*お斎は、12時より

本年も送迎バスを下記の時間で運行いたします。

是非ご利用の上、お参りくださいますようご案内申し上げます。

佐田 4:20 → 栗尾 4:30 → 正法寺 4:40 →
→ 小谷 4:45 → 東里(神社前) 4:55 → 唐川 5:00 →
→ 出合 5:10 → 市場 5:15 → 矢根 5:20

和屋 5:50 → 櫻見 5:55 → 坪口 6:00

送迎バスご利用希望の方は、

各地区代議委員まで申し込みください

しかし、人間の「願い」なんて、ええかげんなもの。「ごまめの歯軋り」。そやうで、だれかのためになにかをしてあげるのではなく、おおきな何かに「願われて生かされている」この身といたぐなら、愚かと見えようが、ちっぽけなことと笑われようが、計画立てて我が身の力いっぱい死ぬまで励んだら。それで「いきる」実感が味あえるのかなと思います。遊んでひとり喜んでいますのや。

雀の涙
この夏の猛暑の影響でどうか、気がついでみると今年は雀が野にも庭にも少ないネ。その雀の涙って貴方みたことある? 見たことはないけれど、さぞかし目にもとまらぬほどのささやかなものだろうネ。しかし、雀の涙ほどの善意も、集まればそれで我が町の福祉が動くのです。

雀
若いとき身についた性癖・生活態度などは一生直らぬ。とくに若いとき習い覚えた道楽からはなかなか抜け出せない。幼児教育、家庭の様、の恐ろしさを、今どきつくづく思われます。

